慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	故橋本増吉教授の追憶
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	2009 - 1957
Jtitle	史学 Vol.29, No.4 (1957. 3) ,p.102(466)- 106(470)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19570300-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

故橋本增吉教授の追憶

松本信廣

我國の近代歴史學は中國考證學とヨーロッパ近代史學との交流して生み出されたものと云はれてをる。東洋古代史の開拓に大きな足跡を殘した故橋本教授は、その緻密な考證と犀利な批判とによつて大正及び昭和初期の我國學界に獨自の地位を占められていた。我慶應義塾は、我國近代東洋學の鼻祖と云はれる三宅米吉、那珂通世兩博士を生み、兩氏共に官學で活躍されたが、橋本教授は奇しくも官學より入つて本塾の教鞭をとられることとなり、故田中萃一郎博士の創められた三田史學の育成者として貢献される所大なるものがあつた。先生の師事された白鳥庫吉博士は歐州の近代的東洋學を我國に導入された功勞者であり、また今一人の恩師として當時の東大には中國史籍に對して造詣極めて深くその人格また溫厚玉の如き市村瓚次郎博士あり、此二師に就て東洋史を修め、その上同學の友として羽田亨、原田淑人等の俊秀と机を並べ、氏が後年東洋史家として一方の雄となり、毅然として屈しない論陣を張るようになつたのは當然のことと云はねばならぬ。九州の諫早に生れ、日清日露の帝國主義發展期の風雲を身近に見きゝして氏の血管には九州男兒の熱血が激(たぎ)つていた。此點は吾々のような一世代おくれた者と政治的見解に甚だへだゝりがあつた點は否まれない。

先生は東大を卒業されてから一時女學校に教鞭をとられていたが、阿部秀助氏が歐米に留學された際、その後を受けて我慶應義塾大學の豫科に經濟地理を講ぜられることとなつた。また同時に普通部に於て東洋史を講じ、當時普通部生であつた自分は、先生自著の東洋史教科書

によつて薫陶を受けた。世界地圖の圖表を手にして階段を駈けのぼつてくる先生の意氣は、長槍を持つて馬を走らせるコサック兵の慨があつた。講義も明快であつたが、怠けて騒ぐ學生共に對し、出席簿を投げつけて叱責される鐵火の如き一面をそなえられて怠惰學生から畏憚せられていた。

先生の卒業論文は、シナ古代の姓氏の研究であつたが、その後シナの天文をよく研究し、「東洋學報」に發表された「書經の研究」は、氏の古代史家としての地位をうち建てたものであり、また「史學雜誌」に耶馬臺國の九州説を論じた一篇も當代の碩學を完膚なく論難し、天下の學者の目をそばだたしめたものであつた。先生の最も得意とされるものは、相手の論文の一端の缺陷を摘發して全體を覆す方法であり、論客としては、全く恐るべき地力を有し、此點は氏をして史家としての名をなさしめたが一面に於てはまた相手の同情を失ひ、氏の立場を孤立化せしめる傾向なきにしても非ずであつた。また論敵を屠るに巧みにして新説を樹立するに未だしと云ふそしりが無いでもなかつた。

普通部を終えて大學に進んだ自分は、田中先生の主宰する史學科に入學して再び橋本先生の教えを受くる身となつた。先生から東洋の古代及び中世史の概説を聽講したが、當時シナ社會史を講ぜられた加藤繁博士の講義に魅せられた自分は、その影響を受けてシナ古姓に關する卒業論文を書き、不思議にも橋本先生のそれと歸を同じうする結果となつたが、その時川合貞一教授の講ぜられたヴントの民族心理學とか柳田國男先生のフォークローアの影響を受けていた自分は、トーテミズムや、等級制親族制の立場からシナ社會を見ようとした。所が當時シナ古代社會の起原をオーストラリアやオセアニアの原住民族のそれと同一階段に置こうとする考え方は、果して妥當であるかどうか全く雲をつかむような處女時代であ

り、此點に於て自分は、その歴史學說が橋本先生の御支持を受けられないことを意識してをり、また事實博士はシナに於けるトーテミズムの存在をありうべからざることとして堅く否定せられたそうで、自分としては其後シナ古代史に立入つて論文を書くことは先生の烈しい論駁を豫期してつい畏縮せざるを得なかつた。

學生時代に自分は山岳會に加入してをり、滿鮮及びシナ大陸旅行を計畫し、そのシナ旅行の團長として橋本先生と行を共にすることとなつた。先生の御性格の苛烈さを知つたのは其時であり、龍門行の前夜、北京兵營の宿舍で先生から大叱責を受けた事は、自分の一生に於ける最もつらい憶い出であり、人生に於て善意が報いられぬことをまざまざと思い知らされた最初の苦しい經驗であつた。先生が上海の三田會の席上に於て今の佐原教授の令兄と大激論をされた主題は、英國東洋政策に對する批判であり、今から思へば夢の如きことであるが、當年の

上海に於て先生の帝國主義的性格として晩年まで變らなかつた大陸政策的見解がデモクラシーを主とする我塾先輩の思想と相容れず、火花を散らして相反撥したのもやむを得ぬ仕儀であつた。

其後に先生の旅行の御伴をしたのは北九州の神護石を調査する小旅行で、これは夏休みに先生の歸省の途次を利用され、耶馬臺國問題の資料を探る爲の旅であつたが、暑熱の中を遺跡から遺跡に跋渉した苦難は、相當のものであり、壯者をしのぐ先生の元氣さは、時にへたばる予を揶揄される程であつた。

田中萃一郎教授が突然なくなられてから先生が史學科の統率者として活躍せられた。「史學」に連載された長城の研究や耶馬臺國問題の長編は、此雜誌の聲價を高めるものであり、後者は後に纒められて先生の畢生の大著述の母體となつたものである。第一次大戰後の擡頭した綜合世界史編述の機運に乘じ、綜合的な古代東洋史の執

筆は、先生の最も得意とされた所である。白鳥門下でありながら、之を逸脱し、三田の孤壘によつていた先生の學才漸く天下に重きをなし東洋文庫の研究員の一人として立派なシナ天文學の大著を同文庫より公刊したり、再び白鳥學派に復歸した觀があつた時代は、先生の最も華かな時期であつたと云える。

貝塚博士は、古代シナの研究者を疑古派と釋古派の二つに分けられたが、白鳥學派は疑古派に屬してをり、白鳥博士は殷虚の甲骨文を僞物視されてをり、その影響を受けて橋本博士も殷虚の價値を初めは全く否定せられていた點など先生も矢張り疑古派の驍將であつたことは疑いをいれぬ。しかし後年先生を疑古派に擬して叱責を受けた事は事實である。實際の所平安堂の息子でビルマ戰線で戰死した岡田平太郎君が、研究會で筆の歴史を述べた際、自分が批評して殷代の筆に叙及した際、先生からそんなものがあつてたまるものかとこつぴどく否定せられたことは今でも覺えてをる。所が岡田君敢然として殷代に筆ありと云ふ自分の說を支持しその卒論を書き終えた。先生のこういふ殷文化に對する偏見は其後次第に是正されてきた。然し後崗に文化層三つありと云ふ中國人の說を否定する大山柏博士の所論に贊して自ら安陽に出むいて發掘するなど、その眞實性を求めて止まぬ精進は、あくまでも不撓執拗な所があつた。

學問に對する努力と共に先生の國家主義的熱情は、政治的な活躍に表白された。自分は此方面にはあまり敎えられる所なく、インドシナ學者であるに拘らず、先生の對越南活動に對しては皆目知る所なかつた。たゞ時々風聞は、先生がその邸宅の一部を割いて越南亡命王族コンディ侯に供し之をかくまうておられるといふことを傳えるのみであつた。先生が大アジア主義の雜誌に執筆された論文の幾つかに災いされ、戰後に於けるパージの不運に遭遇せられたが、かくの如き對社會的活動も先生の學

術的探究の熱を少しも弱めることなく、此點に於て先生は最後まで科學的東洋學者としての路を歩まれたと云へる。先生の晩年の力作は、「史學」の卷頭を飾つた日本古代紀年の研究であり、後に舊著と合し、膨大な耶馬臺國研究の大作となつて東洋文庫から上梓せられることとなつた。戰後の學術的著述出版の困難は先生をして本書の公刊を見るまで多大の心勞を拂ふ憂目に遭はしめたのである。此大冊の原稿の整理淨寫は、先生の晩年の健康をむしばめること大であり、先生をしてついに再び立つ能はざらしめ、先生歿するとまもなくその夫人も亦後を追はれるの不幸を將來したのである。しかし此大著が、ハーバート大學の資力的援助を得、東洋文庫から出版せられたことはまことに先生の學問の眞價値を國際的に樹立したものであり、此事を實現された岩井大慧氏初め文庫關係者及びその他校正に參加された竹田、和田兩君の努力には心から御禮しなければならぬ。

晩年になられてから先生の人格は圓熟さを加え、弟子の育成に對して配慮せられること多くなつた。先生の御教導を受けた多くの若人が今日三田の學運をになうて內外に活動してをる。先生の藏書も幸い遺族の方より寄贈せられて研究室に橋本文庫として永久に先生の餘光を傳えることとなつた。先生の御一生は、まことに日淸戰役の勝利に伴ひ、その民族的自覺の生んだ產物と云はれる我國東洋史の發達史の縮圖であつたと云へる。明治大正昭和の三代を經て那珂史學としての東洋史は興り榮え、そして轉形するあはたゞしい運命を辿つてをる。橋本先生は、我國東洋史がその誕生期にそなえていた國家主義的の性格を最後まで貫いて終られた。今後の東洋史が如何なる道を辿らねばならぬかといふことに吾々はよく反省すると共に私共は、先生の如き大先輩の歩まれ、打建てられた業績に對し、充分の理解を持ち、これをはづかしめないように精進する努力が緊要であらう。